

2021. 11. 4 (木)

## できないことを知る

中野 康人

ある朝突然に

チャペルでお話しするのはすごく久しぶりです。スケジュール帳で先ほど確認したのですけれども、3年ぶりぐらいです。この間に何かあったかなというのを思い返してお話を始めようかなと思ったのですが、実は最近すごく大きな出来事がありましたのでそのことからお話を始めます。2カ月ほど前に、朝起きたら突然足が痛くて動かなくなりました。何だか年寄りくさい話ですね。でも、本当に生まれて初めて何の前触れもなく、突然左足の膝が動かなくなったのです。朝起きようとしたら、痛くて力が入らず起き上がれないのです。

何ができないのか

膝が動かなくなると何ができなくなるかというのを、皆さんは想像できますか。すぐに思い浮かぶのは、立ったり座ったりができなくなるということですよね。それは確かにできなかったのですが、とても驚いたのが、次の日の晩に寝返りを打てなかったことです。就寝中に無意識のうちに人間は寝返りを打っています。どうもその時にひそかに膝を使っているようで、寝返りを打つとウツと痛さで

目が覚めてしまいました。しばらく眠れない夜が続きました。

次に驚いたことは、いすに座れないということです。あの頃はオンラインでの会議がずっと続いている時期だったので、仕事はいすに座ってパソコンの前でという形が多かったのです。座っているだけなら問題ないだろうと思われるかもしれませんが、しかし実は膝が痛いといすに座ってられないのです。いすに深く座ろうとすると、力を入れなくてもどうしても膝が曲がります。とくにフカフカしたいすだと、どうしても膝が曲がって痛くて座れないのです。なのでその時は、いすの先のほうに少し浅く腰掛けて、足を真っすぐにしたまま座っていました。そうすると、何とか一日中パソコンの前にいることができたという感じです。

病気自慢が続きますけれども、一番困ったのがトイレです。先ほど言った、浅く腰掛けるということはいすには座れるのですけれども、洋式トイレに浅く座っても用を足せないのです。もうどうしようもないのです。さらに困ったのは、車にも乗ることができないということです。私は普段大学に徒歩で来ているのですけれども、その時はもうどうしようもなかったので車を利用しました。しかし、普段通りに車に乗り込もうとすると、どうして

も膝を動かさざるをえません。膝が動かないと、まともに車の座席に残り込むことすらできなくなるのですね。

最初は生活のさまざまな場面に支障があったのですが、数日経つと少しずつ膝を使わずに動くコツがわかってくるようになりました。階段を降りるときは痛い方の足を先におろす、昇るときは痛くない方の足を先に出すといった具合です。車に乗り込むときは、足から入らずにまずは体を投げ入れて、その後手で足を持ち上げて乗り込むと膝を曲げずすみません。トイレは多目的トイレなどの手すりがある個室を利用できると楽になりました。皆さんは、突然足が動かなくなることは、あまりないですよ。多分、スポーツをやっている方などはけがをして動かなくなるということもあると思うのですけれども、私は本当に生まれて初めての経験でした。今回のことで、このようなところで膝を使っていたのだとか、生活の中のちょっとした建物のつくりで、まったく人の動きが変わってくるのだということ、いろいろなところで知ることができました。

## 共感の逆裏対偶

さて、今回は「共感する力」というお話を頂きました。このお話を頂いた時に、まず考えたのが、共感の反対とは何だろうということです。字面で考えてみると「反感」という言葉が思い浮かびました。例えばオンライン上のSNSなどでファボるや高評価というのが共感の一つの型だとすれば、サムダウンや低評価というのは反感のあらわれと言えるでしょう。

共感と反感は方向性がまったく逆ですが、

共感するにせよ反感するにせよ共通することがあります。それは、共感したり反感を持ったりする相手のことを知っているからそれができるということです。もし相手のことを知らなければ、いいねもよくないねも評価できないわけです。ですから、先ほど共感の反対は反感だという見方をしましたけれども、共感の反対は実は「知らないこと」なのではないでしょうか。もっと主体的に無視することと言ってもいいかもしれません。「何かに共感できるということはそれを知っているということ」これが成り立つとします。このとき、その逆である「何かを知っているということはそれに共感できること」は成り立ちません。また、その裏である「何かに共感できないということはそれを知らないということ」も成り立ちません。いずれも、知った上で反感を持つことも可能だからです。一方で、その対偶である「何かを知らないということはそれに共感できない」は成り立ちます。つまり共感する力というのは知ること、知る力と対になったものだろうというわけです。

## コロナ禍の中で

今お話を聞いてくださっている皆さん、大学生の時間は知る力を伸ばす、もしくは知ることができるすごく大切な時期です。いろいろなことができる時期だと思います。大学で学ぶ学問によって知る力を養うというのはもちろんです。小中高というのは大体似たような場所に住んでいる似たような人たちと一緒に過ごしていましたよね。それが、大学に入ると、いろいろな地方もしくは世界から集まった人と一緒に勉強ができます。場合によって

は留学をしたり旅行をしたりして、知らない町、知らない国、知らない文化の人々と触れることができます。共感する力の前提となる知る力を養える、そのような時期です。

とはいえ、コロナ禍の中で今はそれができなくなっていますよね。できない状態なのに、知る力が大切だなんて何を言っているのだと思われるかもしれません。4年間しかないうちの2年間がこのような状況である皆さんにとっては、ただできないだけ機会が失われただけではないかと思われるかもしれません。しかし、足が動かなくなったことによって、今まであたりまえだと思っていた日常生活が、いかに自分の体や周囲の環境に支えられていたのかと気づいたのと同じように、コロナ禍によって、大学生活が何もしなくとも得られるあたりまえのものではなく、いかに貴重なものだったのかということが自覚できるようになったのではないのでしょうか。そ

う考えると、この制限のある生活も意味のあるものと捉えられるかなと思います。

幸い今はいろいろなものが前の状況に戻りつつあります。このまま、またコロナ禍の前の大学生活が戻ってきてほしいと思いますが、まだこの後どのようになるかは分かりませんよね。どのようになるか分かりませんが、できるようになれば、また皆さんはいろいろな活動をやって、知る機会を設けてほしいと思います。できなくなることが、また続いたとしても、そこに何か、できないことの気付きがあると思います。できないことを知った皆さんは、そのことで大学で学ぶことへの共感する力をより強く持っています。これからも、知る力を養って、そこからのごとに共感する力を持っていただければと思います。

(社会学部教授)